

# 緑のエッセー

私は相撲界に入る前、北海道弟子屈町の営林署で働いていました。当時は森林鉄道の周辺を野焼きしたり(その当時の鉄道はみんな蒸気機関車です。坂道では石炭を沢山くべて、火の粉を四方に飛ばしながら走っていましたから、線路の周辺の野焼きをしておかないと山火事になりかねません)、1日あたり200〜300本の苗木を植えたり、海拔800メートルの山で雑草を刈ったり、間伐をしたり、いろいろなことを

足でろくろを回して木を削り、木製のお椀などを作っていました。

戦後、日本は経済の発展のために木を伐り、次々に新しい森林に資源を求めてきました。近年、ようやくリサイクルの考え方が普及してきましたが、昔の人はなんでも捨てないで取っておけば使えると考え、そもそも物を粗末にすることがありませんでした。いまは当時に比べて恵まれた時代ですが、その一方でものを大事にしなくなっ

ちやなど、木の温もりを生かした楽しいものができます。それに木製品は飽きがきません。私自身、ずっと木の食器を愛用しています。色が変わったり、傷がつくのはプラスチックや金属の製品なら劣化ですが、木製品なら味となり愛着をもつて使い続けることができます。

こうした木を使用した食器やグッズを通して、森の循環を助け、ものを大切に長く使う精神を子どもたちに伝え



昭和15年5月29日生まれ。  
昭和の大横綱と呼ばれ、ライバルとされた柏戸とともに大相撲の黄金期を築いた。昭和31年の初土俵から、昭和46年の引退までに現在も破られていない幕内最高優勝32回をはじめ、45連勝、2回の6連覇など、さまざまな記録を残し、平成21年には文化功労賞を受賞。  
<http://www.taiho-yokozuna.com/>

してきました。

そうした中で自然と学んだのは、ものを大切に長く使う心ではなかったかと思えます。私が営林署で働いていた昭和30年頃の暖房は薪が主流でした。当時は木を伐った跡には、誰もが必ず木を植えるようにしていました。そのことで、森林が保護されていました。また、燃料に使うだけではなく、さまざまな用途に利用するのが当たり前でした。私も10歳にならないうちから、

まいました。どんなに便利でも化石燃料等の地下資源は、いずれはなくなってしまう。現在ある森林は、かけがえない財産なのです。

弟子屈町の山々では、私が15〜16歳の頃に植えた木がやっと大きく育ちました。北海道のように寒い地方では木の育つのが遅く、50年くらいの年月がかかってしまいます。しかし、育つのが遅いかわりに堅くて丈夫な木です。置いておくので、置物や生活用品、子どものおも

ていきたいというのが、いまの私の願いです。そのため、日本の森を元気にしようという思いを込めた国産材を使ったオフィシャルグッズを作り、売り上げの一部を環境団体に寄付するという取組を始めました。この取組を通して、未来の子どもたちのため、日本の美しい森林を残し、伝えていきたいと考えています。